

氏 名：今 泉 亜 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 5 8 号

学 位 授 与 年 月 日：平成 2 7 年 3 月 1 7 日

学 位 授 与 の 要 件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：精神科病院に長期入院する高齢女性患者が語る「生きている
世界」－社会復帰病棟におけるエスノグラフィー

Narratives of Long-Stay Elderly Patients on the World That
They Live in: Ethnography at the Female Psychiatric
Rehabilitation Ward

論 文 審 査 委 員：主査 守 田 美奈子

副査 武 井 麻 子（正研究指導教員）

副査 筒 井 真優美（副研究指導教員）

副査 佐々木 幾 美

副査 本 庄 恵 子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の動機と背景】

日本では、精神科における入院期間の短縮化と退院の促進が進められているが、現状では長期入院患者は減少しておらず、高齢化によるさまざまな問題が指摘されている。だが、高齢の長期入院患者の多くが女性の統合失調症患者であることは、あまり注目されていない。彼らの退院がなぜ進まないのかを考えるためには、患者自身がどのような世界に生きているのか、これからの人生をどう考えているのかを知る必要がある。

【研究の目的】

精神科社会復帰病棟でのフィールドワークを通して、長期入院の高齢女性患者たちが「生きている世界」とはどのようなものであるかを、彼女たちの語りから明らかにする。

なお、「生きている世界」とは、研究参加者自らが語った、内的世界と外的現実の全てを含む体験世界のことをいう。

【研究方法】

本研究ではエスノグラフィーの方法を用い、精神科病院の女性社会復帰病棟で 1 年 10 か月、週 1 回、日勤帯に患者と関わって過ごすフィールドワークを計 87 回行った。

研究参加者は、70 歳以上で通算入院期間が 40 年以上の 3 名と約 10 年の 1 名の女性患者である。また、補助的情報を得る目的で、9 名の看護者に半構成的インタビューを行った。

本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会（2013-85）及び病院の研究倫理審査委員会

の承認を得て実施し、研究に参加した患者と看護師から文書による同意を得た。

【結果】

研究に参加した4名の患者は、いずれも独特の生きている世界をもっていた。ある患者は人からリスクとされる「正しい人」になろうと日々努力をしており、ある患者は病棟や他の患者たちをシニカルな目で批評する一方で、自分には「待ってくれている人」がいるというファンタジーを持ち続けていた。また、被害的になりやすく、現実ともファンタジーともつかない話をして聞かせる患者や、病院を「終の住処」と捉え、退院させられないよう「喧嘩をしない」という戦略を意図的にとっている患者もいた。

4人とも「自分は馬鹿だ」と否定的に語り、修正することはできなかった。だが、その背景には幼少時からの家族葛藤があることが少しずつ分かってきた。しかも彼女たちは他者に頼らず、自分だけを頼みに生きてきたが、結婚し子供を育てること、さらには職業をもつことにも失敗したことが心の傷となっていた。彼女たちの行動の裏には、人に認めて貰いたい、構ってもらいたいという切なる思いがあったが、人に理解してもらえそうな形で表現することは難しかった。

しかし、研究者と何気ない会話をかわすうちに、徐々に彼女たちは自らの生きている世界を語り始め、そのことに喜びを見出すようになった。

【考察】

研究参加者たちの拭いがたい否定的な自己像と他者への不信感の背景には、幼い頃からの度重なる自己愛の傷つき体験があった。しかもそこには、戦後の時代を生きた女性ならではの困難があった。自分の存在を受け入れてくれる家も子どももなく、働く場もない彼女たちに居場所を提供したのは、精神科病院だけであった。そのため、彼女たちは病院を自らのアイデンティティの拠り所とするしかなく、退院は自己の存在そのものを揺るがすことだったのである。

しかし、彼女たちが頼っていたのは「病院」ではあったが、「人」ではなかった。スタッフの異動の激しい病棟にあって、彼女たちはいつか見捨てられるのではないかという不安を抱え、身体のことさえ医師や看護師に相談せず、独自のセルフケアの方法を編み出していた。その一方で、自分は他の患者とは違うと思うことで自尊心を保っており、こうした「自恃の精神」や自分なりの信念、そしてファンタジーが、この病棟に生き残るための彼女たちの支えとなっていた。

他者に抜きがたい不信をもつ彼女たちが心を開いて、自らの世界を語るようになるには、傍にいて言語的にも感情的にも反応を返すというやりとりが重要であった。彼女たちが求めていたのは、雑談ができるような、気の置けない、対等で安定した関係だったのである。

【結論】

人生の初期から自己愛の傷つきを体験し続けてきた患者の他者への不信感は根深く、しかも職員の異動が多く、長く安定した関係を維持することが難しい治療環境は、ますます患者とスタッフとの距離を遠ざけるものとなっている。しかし、そのような状況の中でも、患者たちの感情に耳を澄ませ、それに反応することでつながりを生みだし、安全感を提供することは可能である。逆に、そうしたアプローチなしに退院促進を唱えても、それは患者に不安と苦痛を与えるだけになりかねないのである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、精神科病棟での1年10か月にわたるフィールドワークに基づくものであり、結果では研究参加者となった女性高齢患者たちの豊富な語りが生き生きと示されている。そこには、研究対象としての患者ではなく、同じ女性として、この社会に生きる者同士の共感に基づく関係がみてとれ、だからこそうした興味深い語りが得られたものと評価できる。

また、研究参加者のほとんどが自己卑下するような言葉を口にする一方で、「自恃の精神」ともいべき信念をもち、自分なりに逞しく困難な状況を生き延びようとしていること、患者たちが病院に依存しているようでいて、実は病院スタッフを頼りにしているわけではないこと、にもかかわらず対等な立場で気軽に無駄話ができるような関係を求めていることなど、本研究で明らかにされたことは、病棟で業務に追われる看護師たちがともすれば見過ごしがちな点であり、貴重な証言といえよう。

また、彼女たちの否定的な自己像には、幼い頃からの度重なる自己愛の傷つき体験や女性として生きる上での挫折体験が関連していることも、彼女たちを理解する上では見過ごすことのできない点である。そして、そうした過去の体験は、病棟スタッフとの関係においても再現されているのだが、そのことに気づかれないでいることも多い。結果として、「厄介な患者」「難しい患者」というレッテルを貼られて、そのまま入院が長期化してしまいかねないのである。

こうした、とくに高齢化した女性の長期入院患者の抱える重要な問題を、患者の視点から描きだしたことは、看護研究として高く評価できる。

また、文章も読みやすく、論理的に展開されており、学位論文としての水準を十分に満たしている。

博士学位論文審査会では、本論文を学位規程第3条に定める博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。その後、口頭での最終試験を行い、これについても「合格」と認めた。